

藤田富士夫

(埋蔵文化財センター所長)

はじめに

古代越中国の河川の渡河地点について、『万葉集』にみえる次の歌が示唆的である。越中国守大伴家持が天平 20 年(748)の春先、出挙巡行の際に詠んだものである。

- ①礪波郡の雄神川の辺にして作れる歌一首

雄神川紅にほふ少女らし葦附取ると瀬に立たすらし(巻 17-4021)

- ②婦負郡の鵜坂川の辺りにして作れる歌一首

鵜坂川渡る瀬多みこの吾が馬の足搔きの水に衣濡れにけり(巻 17-4022)

- ③鵜を潜くる人を見て作れる歌一首

婦負川の早き瀬ごとに簪さし八十伴の緒は鵜川立ちけり(巻 17-4023)

- ④新川郡の延槻川を渡りし時に作れる歌一首

立山の雪し消らしも延槻の川の渡り瀬鑑浸かすも(巻 17-4024)

これらには①礪波、②・③婦負、④新川の各郡を代表する河川の「セ」の様子が歌われている。②や④の歌には、「セ」が渡河地点であったことが示されている。

ここでは、古代渡河地点としての「セ」の箇所を疑似想定し、古代道路の敷設位置や作歌の心象風景について私考を述べたい。

セの情景

これらの歌には、いくつかのセの情景が見える。①には「瀬に立たすらし(湍ナギ多々須良之)」、②には「渡る瀬多み(和多流瀬於保美)」、③には「早き瀬ごとに(波夜伎瀬其等尔)」、④には「川の渡り瀬(可波能和多理瀬)」と詠まれている。ここに読み下し文と原文を併記した。読み下し文では、セは一樣に「瀬」と表現されているが、原文では「湍」と「瀬」が使い分けされている。細やかな心象を詠み込んだ『万葉集』の文字の使い分けは、作者の感性とあいまって情景にふさわしい文字が充てられているとみるべきであろう。この点で、原文には読み下し文では味わえない微妙な情景の違いがうかがえる。

手近な、『明解漢和辞典(新版)』(三省堂 昭和 42 年)で調べてみた。【湍】「○ハヤセ。湍流○ハヤい→速○うずまき「一水」㊦うずまく。湍湍」。【瀬】「○セ。川の、浅くて、流れが早いところ」とある。

①の歌では、「少女」が浅瀬に立っている情景に「湍」が用いられている。「少女たちが『葦附(水松の一種)』を採るとして浅瀬に立っているらしい」とする場面である。素足の少女が立つことができる浅瀬である。深さ 20cm もあれば充分過ぎるほどの水音がサラサラ聞こえるような地点が想定できる。

一方、②鵜坂川や③婦負川、④延槻川では、渡河地点に「瀬」が用いられている。特に②と④には家持が馬上にあって、渡河する情景が詠われている。②には「…吾が馬の足搔きの水に衣濡れにけり」とあり、④には「川の渡り瀬鑑浸かすも」とある。これによって、「瀬」は「湍」よりも深さのある文字表現であることが分かる。

家持は馬上で「瀬」の歌を詠んでいる。それはどのような場所なのであろうか。「藤原京、平安京以降の馬は、木曾馬相当の一三〇から一四〇センチメートル右内外の中形馬主体となる。しかし、平安時代でも東国(千葉県)では、小形馬が主体である」(松井章

「考古学から見た人と動物」『平成 15 年度秋季企画展 捕る 愛でる 拝む一人と動物展一』新潟県立歴史博物館 平成 15 年)とされている。馬の生態に詳しい富山市埋蔵文化財センター近藤顕子学芸員のご教示によれば、家持がミヤコから愛馬を連れてきたとすれば体高 130～140cm 位の中形馬の可能性が高く、地面から鐙までの高さは約 70～80cm となるという。

「…浸かすも…」(巻 17-4024)は、「雪解けによる増水によって。ツカスは漬ける」とある。「瀬」の表現から、そこは豊かな水流が石列の表面をまたぎ白波を立てている場所であったようだ。そのような渡河地点にあって、「吾が馬の足搔きの水に衣濡れにけり」や「鐙浸かすも」と(たぶん誇張気味に)いった深部もあったとするのが現実的風景であろう。家持は、深い所では、“それ位もあったよ”といった文学的情景をかきたてられる場所を馬行したのである。

巡行に際しての渡河地点

②婦負郡の鵜坂川の辺りにして作れる歌一首

鵜坂川渡る瀬多みこの吾が馬の足搔きの水に衣濡れにけり(巻 17-4022)

③鵜を潜くる人を見て作れる歌一首

婦負川の早き瀬ごとに簀さし八十伴の緒は鵜川立ちけり(巻 17-4023)

④新川郡の延槻川を渡しし時に作れる歌一首

立山の雪し消らしも延槻の川の渡し瀬鐙浸かすも(巻 17-4024)

このように配置された歌の順序は、春巡行の経路を暗示している。②鵜坂川や③婦負川の現地比定は確定したものではないが、「渡る瀬多み」などの記載から、富山平野を流れる古・神通川へ諸説は充てている。

先に、筆者は「古代婦負郡の『郷』擬定と栃谷南遺跡の位置」(『富山市栃谷南遺跡発掘調査報告書Ⅲ』富山市教育委員会 2002 年)を考証した中で、主要地方道富山・小杉線(旧・国道 359 号線)が神通川左岸の富山市有沢から右岸の布瀬へ抜けるルートを古代幹線道路に想定した。この地域には延喜式内社鵜坂神社が鎮座しており、②の歌の「鵜坂川」は、この近域に存在したとされている。対岸右岸には、自然地勢に由来すると思われる「布瀬」や「黒瀬」の地名がある。神通川河口から約 10km 上流に位置する当地には「瀬」にふさわしい河川景観が広がっている。写真 1 は、鵜坂神社のやや下流地点から東を望んだもので古代渡河地点の「瀬」の疑似情景を重ねて平成 16 年 2 月 18 日に撮影した。前面には、家持が神宿る山として賞賛した「立山」連峰(巻 17-4000、4001、4003、4004)が大パノラマを描いている。

神通川を渡って東行するには、もう一つ大きな河川を渡らなくてはならない。常願寺川である。この渡河地点は、左岸の富山市朝日から右岸の中新川郡立山町利田にかけての地域に存在したと私考している。常願寺川の河口から約 8 km 上流の地点である。ここに渡河箇所を比定するのは、古代の駅伝路(また駅路、郷道の重複道として)を一般県道蓮町・新庄線と重ねて想定しているからである。富山平野を斜方位直線道として計画的に敷設されたこの道路は、利田地内で神護景雲元年(767)成立の東大寺領越中国荘園「大荊荘」開田図に記された「從郡川枯往道」の放線先端へと連なっている。なお、ここでの大荊荘の現地比定は、私考によるものを用いている(「東大寺領大荊荘の現地比定と遺跡」『森浩一 70 の疑問 古代探求』中央公論社 1998 年)。「從郡川枯往道」は、「『郡』より『川枯』へ往く道」と解されている(藤井一二『東大寺開田図の研究』塙書房 1997 年 302 頁)。「郡」は新川郡衙を指すという。この斜向道を北進すれば、9 km 余



写真1 神通川の擬似渡河地点

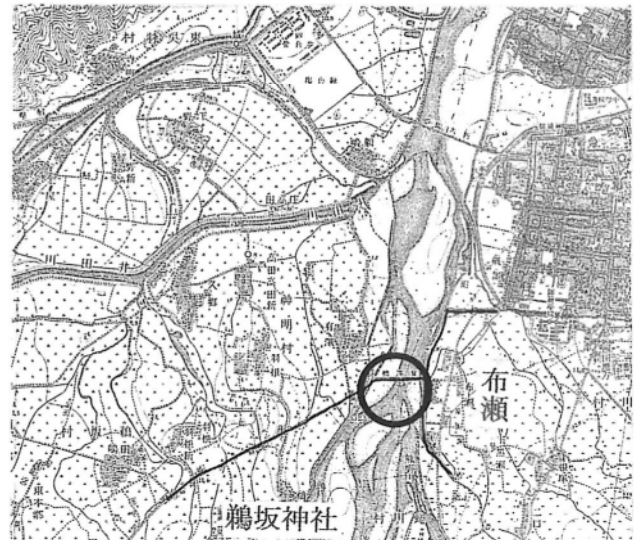


写真2 常願寺川の擬似渡河地点

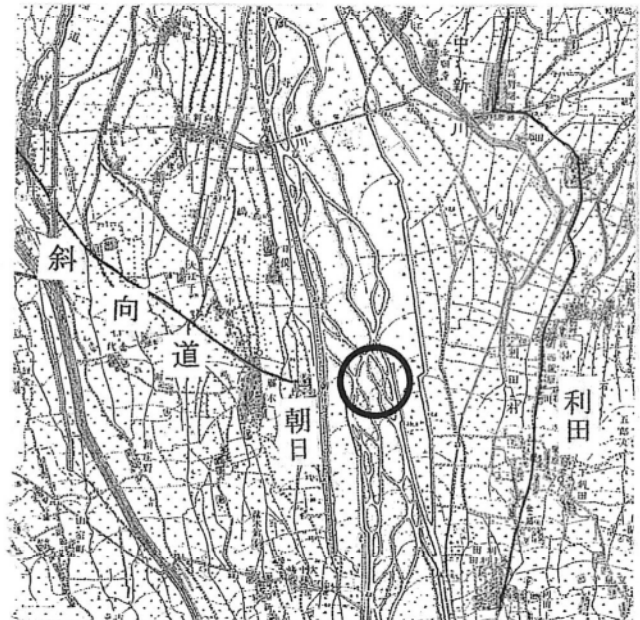
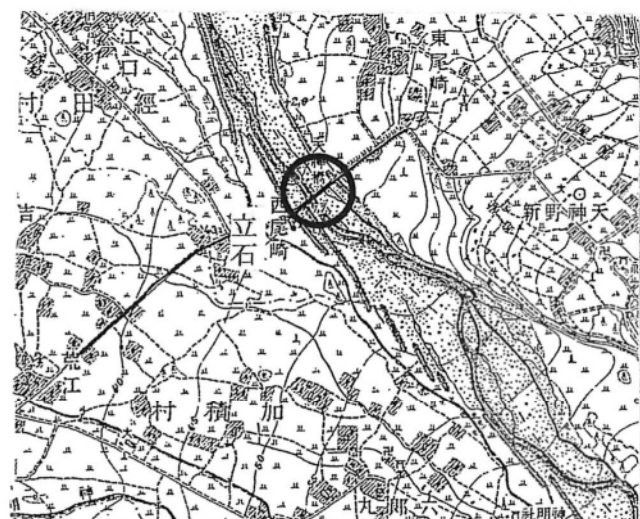


写真3 片貝川の擬似渡河地点



で筆者が新川郡衙と想定している米田大覚遺跡へ往きつく。また、磐瀬駅と擬定している蓮町遺跡へと直結する。これらのことから、本道が古代の幹線道路と重なっているとみて、当地に渡河の疑似情景を想定した。ここでもやはり、無数の石むれが水流に洗われ白波を川面に描く景観を呈しており、渡河にふさわしい「瀬」地勢をなしている。写真2は、左岸から馬上で渡河する人の目線の高さを意識して2001年12月21日に撮影した。ここでも眼前に広がる「立山」が美しい。

次に、家持は、魚津市を流れる片貝川の情景を詠んでいる。

⑤片貝の川の瀬清く行く水の絶ゆることなくあり通ひ見む(巻17-4002)

ここでの「川の瀬清くは」、原文で「可波能瀬伎欲久」と書かれている。「瀬」地勢を示している。④新川郡の延槻川を渡りし時に作れる歌一首にある「川の渡り瀬」の語感が示唆するように、「瀬」は郷域の人々が日常的に利用している渡河地点を表わしているとしてよいだろう。

片貝川にほど近い中流左岸に延喜式内社建石勝神社がある。現在地より上流側に旧跡地の伝承地があり、そこに立石の地名があり、かつ川原石の「立石」が存在する(紙谷信雄「魚津の立石考」『富山市日本海文化研究所報』第29号 2002年)。立石には、駅路に関係するものがあるとする研究がある(木下雅康『古代の道路事情』吉川弘文館 2000年)。紙谷氏は、駅路とするには慎重さを示しつつ、「この旧社地の立石は片貝川を渡る、あるいは氾濫原を辿る一つのポイント、即ち渡河点を示す場所であった可能性が推定される」としている。同感である。

けだし家持が詠んだ「片貝の川の瀬清く行く水の絶ゆることなく」の情景として、この土地はふさわしい。私は、「立石」が交通に関する地名遺称とみて、当地辺りに幹道の渡河地点を疑似想定しても良いと思っている。写真3は、そのような観点から2001年12月8日に、魚津市の立石・西尾崎地内の片貝川に架かる天神橋から上流を見すえて撮影した。その地は片貝川河口から約3.8km上流に位置する。当日は、雲に隠れて頂は望めなかったが、晴天時には立山連峰が美しい。

おわりに

ここに「万葉集」の湍・瀬を手がかりとして、その疑似情景の地を探索した。歌の「瀬」には渡河地点が比較的多く示されている。その地点は河川中流域に想定できそうである。大きな平野が展開する富山平野では河口から10km前後上流、平野の狭い片貝川流域では河口から4km前後の上流である。共通して河原石が散乱し、今日でも清流が石の瀬をこえて波立ち走る風景が展開している。そして、いずれも「立山」の眺望が格段に映える地なのである。家持の春巡行での歌は、川の瀬と立山の美しさとが重なった渡河地点で主に残されているようだ。登場する川は神宿る立山(巻17-4000、4001、4003、4004)を源流としている。⑤の片貝川の歌(巻17-4002)は、立山を称える歌の間に挟まれている。切り離して見ているとわからないが、配列から見ればこの歌もまた「立山」を称えている。神宿る立山からの清流が、白波を立てそして水音として感受できる場所においてこそ家持の心の琴線がふるえたのである、とするのは穿ちすぎであろうか。

引用参考文献

中西進『万葉集 全訳注原文付(四)』講談社文庫 1983年